

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究 (C)
研究期間：2007～2009
課題番号：19520372
研究課題名 (和文) ドイツ語の結果構文について：その内部構造と構文間のネットワークを中心に。
研究課題名 (英文) On Resultative Constructions in German: With Special Reference to its Internal Structures and its Relation to Other Constructions in German
研究代表者 島 憲男 (SHIMA NORIO) 京都産業大学・外国語学部・准教授 研究者番号：80360121

研究成果の概要 (和文)：「構文」としての統一的なまとまりを持つ一方で、実際の用例には意味的・統語的な多様性が観察されるドイツ語の結果構文は、3種類の統語的・意味的基準に基づいて六種のサブタイプに区別される。そのサブタイプ間の「派生/拡張」関係を規定し、さらに、ドイツ語に存在する「複合動詞」表現や「同族目的語構文」との接点を考察することによって構文間の関連を解明しようと試みた。

研究成果の概要 (英文)：The so-called resultative constructions in German may be subsumed into a single category with a unified form. However, this research shows that German resultative constructions indicate a diversity of grammatical characteristics as well and can be divided into six subtypes on the basis of three distinctive syntactic and semantic criteria. It is also pointed out that these subtypes are significantly related to each other, and motivates the derivation and expansion of the other subtypes. This research involves other grammatical constructions in German as well, i.e. prefix-verb constructions and cognate object constructions to show how these constructions are related to each other.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：独語学、結果構文、複合動詞、同族目的語構文

- | | |
|--------------------------------------|--|
| 1. 研究開始当初の背景
「ドイツ語結果構文」は、「構文」としての | 統一的なまとまりを持つ一方で、その構成メンバーには意味的・統語的な多様性が観察さ |
|--------------------------------------|--|

れ、興味深い二面性を合わせ持つ。ここ約 10 年間で結果構文の研究は主として英語を中心に集中して行われてきており、また様々な言語を専門とする多くの研究者が関心を持つという点で、「結果構文」そのものが汎言語的に非常にユニークな性質を持つものであることは疑う余地もないが、ドイツ語学の分野ではまだ体系的な研究が存在しないのが現状である。多くの場合、英語で主張されていることがドイツ語でも当てはまるといった事例研究か、結果構文の特性のうちで僅かに一部分を扱ったものしかない。

2. 研究の目的

(1) 本研究課題はドイツ語における結果構文の包括的・体系的な研究として、結果構文の諸特性をできるだけ詳細に解明し、どのような特性によって構文としてのまとまりを保ちながら、どのような条件の下で観察された諸特徴がどの程度まで変化するのかを明確に提示することを目的とする。

(2) ドイツ語では結果構文の一側面と隣接・近接関係にあると考えられる「複合動詞」表現や「同族目的語構文」との接点や境界を考慮することで両者の関連性・連続性も考察することを試みたい。

3. 研究の方法

(1) 初年度は分析対象となるデータの拡充と平行してドイツ語結果構文の諸特性を抽出した。研究代表者による従来までの研究成果は、主として形容詞として生起する結果述語に集中していたが、前置詞句として生起する結果述語のデータも合わせて収集してゆき、ドイツ語における結果構文の、より包括的な分析が可能になるよう配慮した。

(2) 本研究では、Goldberg/Jackendoff (2004) のように結果構文を広義に解釈するのではなく、まず最も中心的な型であると考えられる S V O A/P の形式に限定し、その原点を使役構文とみる先行研究を継承した。その際、動詞の種類にのみ注目して行った従来の形式的な二分法を超えて、統語的・意味的基準に基づきより精密なサブタイプの同定を行った。

(3) 平成 20 年度は、ほぼ同一の事象を言語化する際に、ドイツ語に同時に存在する「文法的手段としての結果構文」(*den Teller leer essen*) と「語彙的手段としての複合動詞」(*den Teller ausessen*) の領域に着目し、結果構文と複合動詞との関連性・連続性を取り上げ、2つの事象が言語的に1つの語彙と

して実現するか、2つの語彙で文法的手段によって言語化されるか、その傾向を探った。

(4) 平成 21 年度には、結果構文の中でも決して典型的とは考えられないような、自動詞を基底動詞としているものを特に取り上げ、結果構文の中での対格目的語の生起条件を、同様に非典型的な対格目的語の生起を可能にする同族目的語構文の場合と比較対照しながら、ドイツ語の中に存在していると考えられる、ある種の「自動詞の他動詞化メカニズム」のもとで、従来互いに共通性を持つとは全く考えられていなかった両構文の統一的な分析を試みた。

4. 研究成果

(1) 結果構文は、「構文」としての統一的なまとまりを持つ一方で、実際の用例には意味的・統語的な多様性が観察され、興味深い二面性を合わせ持つ。Goldberg/Jackendoff (2004) のように結果構文を広義に解釈するのではなく、本研究では最も中心的な型であると考えられる狭義の結果構文の形式 S V O A/P に限定した上で、従来の二分法・三分法を越えてより精密な六種のサブタイプを設定した。その際、分類基準には、(a) 構文中に生起している結果項 (A/P) の構文への統語的・意味的統合の程度、(b) 構文の中心としての動詞が有する他動性、(c) 構文中に生起する対格目的語の種別 といった三種類のパラメータを採用した。さらに個別のサブタイプの統語的・意味的な特性や構文全体の持つ意味の変容可能性、サブタイプ間に生じている「派性」関係などを解明した(島 2008、Shima 2009b、2010c 参照)。

(2) 本研究はより実証的な研究を目指すため、研究基盤となる言語データを広範囲に渡って収集するよう心掛けているが、従来の先行研究では言及されることのなかったような実例を発見したことにより、当該構文が持つ理論的重要性に加えて、現在なおも外界の状況に応じて適用される言語表現領域を拡大し続けている、生産性の高い構文であることが改めて実証された(島 2008、Shima 2009a、2009b、2010c 参照)。

(3) ドイツ語では結果構文の一側面と隣接・近接関係にあると考えられる「複合動詞」構文との接点や境界を取り上げ、文法的手段による表現と語彙的手段による表現間の関連性・連続性を考察し、表現上の役割区分の解明を試みた。当初「複合動詞は一語で同時に複数の外界事象をある程度まで表現することが可能な語彙的手段ではあるが、その適用範囲は特定の事象の組み合わせに限定され、

それに対して、文法的表現手段である結果構文では組み合わせる事象への適用範囲が広く、事象の組み合わせも多様である」という作業仮説に従って検証を進めたが、サブタイプモデル上の両端では確かにこの特徴が観察されるものの、連続体の中間部分では両表現の棲み分けは必ずしも明瞭ではないことが判明した。そこで多様な複合動詞を同時に考察対象とするのではなく、今回はまず不変化詞(=分離前綴り) *aus-* を持つ「除去」を意味する複合動詞に限定し、目的語の生起条件に基づいて両者を比較した (Shima 2010a、2010b 参照)。

(4) ドイツ語結果構文のサブタイプの1つである自動詞を基底動詞とした事例と、同族目的語構文は、共にドイツ語文法の中では中心的な表現形式とは言えず、むしろ周縁的・例外的形式で、互いに関連性の薄い構文である。と一般的には見なされているが、どちらも基底動詞が本来要求し得ない文要素である対格表現の生起が当該構文中では許されている点で共通・類似の構造を持つと考えられる。結果構文のように一定の統語形式の中に意味の多様性や拡張が観察される際に、あるいは同族目的語構文のように一定の意味領域の中で類似・関連する統語形式が複数存在する際に、互いに関連し合い、同一の文法的カテゴリーに属しながらも、互いを識別するのに足るだけの差異を生じさせるために、基底動詞に何らかの影響を与えるような(例えば動詞の他動性や項構造を変化させる)メカニズムが機能すると仮定した場合、今年度研究対象とした両構文は自動詞の他動性を他動詞の域にまで高める「自動詞の他動詞化メカニズム」とでも呼ばれうるような意味的・統語的な仕組みで同一の文法的カテゴリー内に「変種」を生じさせた構文であると考えられる (Shima 2010年9月出版予定)。

(5) このような観点からの研究は、今後さらに多くの構文間でも慎重な検討を重ね、経験的に検証される必要があるが、従来互いに共通性を持つとは全く考えられていなかった構文間の関連付けを試みた点で、より大局的な視点からのドイツ語文法体系の研究や、さらには言語類型論的な研究の可能性へと結びつきうるものとして期待している (Shima 2010c 参照)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

(1) Shima, Norio、Inneres Objekt als

- grammatisches Transitiverungsmechanismus、*Festschrift für Herrn Prof. Dr. W. Kürschner*、査読無、2010年9月出版予定
- (2) Shima, Norio、Über die Vielfältigkeit resultativer Konstruktionen im Deutschen: Ein Erklärungsversuch ihrer Genese、*京都ドイツ語学研究会 会誌 Sprachwissenschaft Kyoto*、査読有、9号、2010c、3-19
- (3) Shima, Norio/Naruse-Shima, Ryoko、*Leer essen oder ausessen?* Die Konkurrenz zwischen Resultativen Konstruktionen und Partikelverben im Deutschen、*Japanische Gesellschaft für Germanistik (Hg.)*. *Grammatik und sprachliches Handeln: Akten des 36. Linguisten-Seminars, Hayama 2008*、査読有、2010b、110-124
- (4) Shima, Norio/Naruse-Shima, Ryoko、Objektwechsel bei Partikelverben im Deutschen: Unter besonderer Berücksichtigung Privativer Verben mit der Partikel *aus-*、*京都産業大学論集人文科学系列*、査読有、42号、2010a、73-86
- (5) Shima, Norio、Die Sekiguchi-Grammatik und 'resultative Konstruktionen'、Ezawa, Kenosuke/Sato, Kiyooki/Weydt, Harald (Hg.). *Sekiguchi-Grammatik und die Linguistik von heute*、査読有、2009b、93-99
- (6) Shima, Norio/Naruse-Shima, Ryoko、Eine kontrastive Textanalyse der *resultativen Konstruktionen* im Deutschen und Englischen、*京都産業大学論集人文科学系列*、査読有、40号、2009a、33-49
- (7) 島 憲男、ドイツ語の結果構文とその拡張、*阪神ドイツ語学研究会会誌*、査読無、20巻、2008、18-39

[学会発表] (計7件)

- (1) Shima, Norio、Vielfältigkeit der resultativen Konstruktionen im Deutschen: Ein Erklärungsversuch ihrer Genese、*京都ドイツ語学研究会 第68回例会シンポジウム Aspekte der Grammatikalisierung (2009年5月23日、京都) にて*
- (2) 島 憲男、複合的な事象をどこまで1つの文で表現することができるのか。結果構文と(複合)動詞表現のせめぎ合い、*日本独文学会秋季研究発表会 (2008年10月12日、岡山大学) にて*
- (3) Shima, Norio/Naruse-Shima, Ryoko、*Leer essen oder ausessen?* Die Konkurrenz zwischen Resultativen

Konstruktionen und Partikelverben im Deutschen、日本独文学会第 36 回語学ゼミナール (2008 年 9 月 7 日、葉山)にて

- (4) Shima, Norio、Resultative Konstruktionen im Deutschen: Mit besonderer Berücksichtigung der Konstituentenreihenfolge “S-V-NP-A/P”、V. Ehrlich 教授 (Universität Tübingen) 研究室研究会 (2008 年 3 月 10 日、テュービンゲン、ドイツ) にて
- (5) 島 憲男、ドイツ語の結果構文とその拡張(続)、阪神ドイツ語学研究会 (2008 年 2 月 24 日、大阪) にて
- (6) 島 憲男、ドイツ語の結果構文とその拡張、阪神ドイツ語学研究会 (2007 年 12 月 16 日、大阪) にて
- (7) Naruse-Shima, Ryoko/ Shima, Norio、Resultative Konstruktionen im Deutschen und Englischen、日本独文学会第 35 回語学ゼミナール (2007 年 8 月 30 日、京都) にて

6. 研究組織

(1) 研究代表者

島 憲男 (SHIMA NORIO)
京都産業大学・外国語学部・准教授
研究者番号：80360121

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：